

---

# 鈴歌、異世界へ

梨緒（元ブライトハート）

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鈴歌、異世界へ

### 【Zコード】

Z8601Y

### 【作者名】

梨緒（元ブライトハート）

### 【あらすじ】

それはどこか遠い星の話、そこに地球人が入ってしまった。そんなお話です。

「これは「異世界旅行へ」の書き直し版です。初見の方は「異世界旅行へ」を見ない方が楽しめるかと思われます。はい。よろしくおねがいします。

## 始まり（前書き）

ブライトハート改め梨緒です。  
書き直し版、投稿いたしました。

結構違つた物語になりそつた予感がしてなりません。

## 始まり

事の始まりは母のK4の中。

「ねえ、お母さん」

ん？

「おゆれんせ、黒田縣であると想ひへ」

母は少し考え込むよひて、  
そして言つたのです。

「信じればあるよ」

}{}

祖父の家へ向かう車の中、自分は若干車酔いになりつつ携帯ゲームを。

ティーリング  
(よじり)

それは育成ゲームでハマるとことハマるといふ評判の良いものだ。

「ホラ、鈴歌、そろそろゲームやめて。おじいちゃんの家見えてき

たよ

「はあー」

ちなみに言つと祖父の家は超のつくド田舎で、家の裏には山がある。  
昔は自分もよくそこで遊んだものだ、と思い出した。

(わうだ、じうせ暇だし行つてみようか)

ゲーム機の電源を消しながら思つ。

「ひへんはジ リの「となりのトロ」の登場人物が住んでそう  
なところだ。

静かで空気がよく、川の水も冷たくて美味しい。

そんな中で幼いころの自分は育つたのだ。

都会へ出たのは小学4年生のときだつたか。

今では並んで一番前だつたが、すっかり背も伸び、後ろから数人ほどだ。

昔が懐かしい

そこでふと、幼いころの記憶が蘇る。

(これは、なんだ?)

まだ見たことのない、モノ

(なんでここにあるんだろう?)

この世のモノとは思えない、ブッタイ

どこか違う星から来たと思い込んでいたモノ達……。

幼いころの自分は“異世界”を信じていた。

今は亡き父が小説家でファンタジーモノを書いていたせいもあって

かどつかは分からぬ。

ただ、気づいた時には母に聞いていた。

「異世界つてあると思ひへ。」

わざと尋ねるよしにしたのは父を母に出したのであるべ、と思つた。

そして母はわざつと

「信じねばあるよ」

と、車のエンジンを止めながら言つた。  
エンジンが止まつたこと、それを自分は何か運命が変わる、  
扉の開いたことを知らせる音に聞こえたのだった。

## 始まり（後書き）

更新はチママチマやつてこさせたいと思いますので、今後ともよろしくおねがいいたします。

森の祠（前書き）

ストーリー変えるつていつたし大丈夫・・・。

## 森の祠

祖父の家に入ると、昼ごはんに着くと言つていたからか昼飯が用意されていた。

## ちなみに祖父の料理だ

本人に聞いたところ薔薇ホテルの料理人をしていた。そうなると

祖母はといづと何年か前に亡くなっています。

けいへん。

今日もそんなところだ。

גַּתְּהַנְּגָנָה

昼を食べて挨拶をする。

食べ物は粗末にしてはいけない。

り前のことだ。作ってくれる人に感謝を、そして命あるものを頂くわけだから当然

今の季節は夏。

それでも暑いから扇風機の前に陣取る。

「風」ないから正面に座んな馬鹿！」

・・・怒られた。

縁側に出てみる。

田の前には小さな庭があり、祖母が好きだったキンレンカが咲いていた。

花言葉は愛国心、困難に打ち勝つといつものがあるらしい。

観賞用だけじゃなく、食用花でもあると祖母から聞いたことがある。

キンレンカを見ていて思い出した。

森に行こうと思つてたんだつた。

「お母さん、おじいちゃん、ちょっと森に遊びに行って来るー」

「気をつけなさいね」

「行つてらつしゃい」

財布と携帯とゲーム、ティッシュとハンカチなどを入れた大容量リュックを引っ掴んで玄関に行く。

靴は歩くのに適したスニーカーだ。

カラカラと戸を閉めて歩き出す。

家の裏手に回ればすぐ森だ。

案の定、木が生い茂つた森が見える。

下からも草がぼうぼうに生えてるのでわしわしと掻き分けながら進む。

もつもつと進んでいく。

森から山に変わったようだ。

踏み固められた山道が。

「んー・・・やつぱ上に行きたいよね」

やや上り坂を歩く。  
しばらく歩く。  
もくもく歩く。

「だるー」

はつまつと血分はめんどくさがりだ。  
だからこんなチマチマ歩いているのが嫌になった。

と、いうわけで

「よし、そんまま上りやがえー。」

身体の向きを90度変えて、こなとこなつのために隠れて持つてき  
たおじこちゃんの軍手を出す。

装着。

いざ、出発。

山道には背の高い草は見当たらぬが、急斜面のこなりは草伸び放  
題だ。

さすが森とこなか山とこなか。

熊でも出るんじゃなこだうか、とこまわり心配になる。

(まあ、大丈夫だろ)

気楽に行こつ、気楽に。

2・3時間経つて頂上が見え始める。

「こよつしーちりと」にじりで休憩しようつか・・・ん?」

座れる場所を探しキヨロキヨロとあたりを見回すと。

「・・・祠・・・かな」

そこには祠、祀っているものが分からぬが。  
シンプルな昔の家をちっちゃくしてみました  
みたいな感じだ。

供え物は何も上がっていない。  
見たからにはなんか供えて行こうかな・・・  
と、リュックをあさる。

ポテチと爽健美茶が。

ちょうど良いやと祠の横に座り、ポテチと爽健美茶を少しずつ残して飲み食いする。

「んで、ここに置いて、と」

ポテチを数枚と、爽健美茶のペットボトルのふたを開けたままそこに置く。

そしてポテチの袋を小さくして持つてきてあつた「」袋に入れておく。

(ポイ捨ては良くないしな)

よいしょと立ち上がりズボンについた草を払う。

そしてまたガサガサと草を搔き分けつつ斜面を登つた。

1時間ほど経つて頂上についた。

この山は登山客も来るため、頂上のあたりの木は切られている。  
見晴らしがよく、キリッとした空気が気持ちいい。

その景色を携帯で写真を撮り、空気を堪能してから下山した。

気分良く夕食を食べ、風呂に入り、布団に横になる。  
意識が遠退くのには時間はさほど掛からなかった。

## 森の祠（後書き）

ポイント、感想など下されば幸いです。

## 行つてゐぬ（遍歴）

読んでいたときあつがといへりぞこま。

行つておます

夢を見た。

（）

あ～眠いな～

カーテンを開ける。

「ん・・・ー？」

様子が昨日と違っている。  
ビックリして引きつる口元、笑つ膝。

「え、え？ タンマタンマ、え？ ちよつとまつてもうれますか、あの」

誰もいない部屋で誰にも答えられない問いをする。

静寂に包まれた部屋がささやき声で包まれた気がする。

「いや」そ・・・

ざわざわ・・・

苦しい、息がし辛い。

居心地も悪くなる。

なんで？

「」

わけも分からぬまま、意識が飛ぶ。

～

とこ'り、夢です。はい。

起きたときズザアツツて部屋の隅に移動しちゃったよ、反射的に。  
おかげでベッドからは落ちるし、落ちたときの音で一瞬の母から怒  
鳴られるし・・・  
なんなんだもん。

でも、

分かっていたのは昨日の祠へ行かなければならぬとこ'り」とだつ  
た。

一階に下つて朝食を食べてこらえてふと気がつく。

(昨日、異世界はあると思うかと聞いたときの違和感、  
そして母の言つた言葉、夢、  
何度も行つていたはずの森(とこ'りか山)に見知らぬ祠があつたこ  
と。  
こんな偶然が起つてゐるのだろうか?)

自分でしてみればよくもまあここまで推測できるんだ、とこ'り具合  
である。

まつやかあーとか思につつ、テンションが上がる。

(・・・ひとつとまでよ~)

祠へ行かなきやないのは分かる、早く行けと自分の中の何かが急かしているから。

でも、それで、もし、「異世界」に飛ばされるとしたら?

関係ないが実をいつと読書家だ。

家の自室には図書館並みの本棚が3つあって、壁一面本だらけっていう感じである。

さらに図つとファンタジーものばかりである。

それらの本から考えれば、異世界に飛ぶ、とこつじとは無こととはい切れなくて

(言い切れない、言い切りたくない)、やらねばならぬことがあるのも分かった。

もしも、のために。  
手紙を書いておく。

何も無くて帰つてこられたのなら恥をかくが、用心する」とこつじ越したこととは無いだろ?。

ほかには、キャンプなどで使えそうなものを探す。

(ちなみに、祖母が花のなんぢやう念で野宿するところだがしょ  
つちゅうあつたらしく、

必要なものは大体そろつてこるはずだ。)

「おじいちゃん、ねばあちゃんのキャンプセットみたいなの元に戻るかわかる?」

美味しい料理をほおばりながら田の前で自分を眺めている祖父に聞

く。

「美智子さんなの？ああ、あるけども、どうした？」

「いやー、何も言わぬ出してくれるとありがたいです」「ふむ……」

無理か。

「お前さん、昨日変な夢を見たか？」

「え？」

唐突な質問にビビる。

その態度はイヒスと並んで珍らしきものだった。

「やつか……」

「え、そつかって……」つづく。

「旭、美智子さんとお前に引き続も、お前の子供もかー。」

え？

「も？」

なんだつていうんだ、まったく。

(ちなみに旭は母、美智子は祖母の名前である)

母がどうしたの？といつた風に自分たちのどういくへん。

「変な夢をみたやつだ。」

「はあ……。」

「やして、お前昨日“祠”を見ただろ？」「

「うつ……。」

それから説教じみた口調で祖父と母から説明を受けた。  
要約するところこんな感じである。

- ・祖母と母も自分と同じように祠を見つけ、供え物をし、変な夢をみた。
- ・祖母も母も何がなんだかわからず、何も言わず、持たず、祠へ行って飛ばされた。
- ・聞いた話によると祖母の母もその母も、こんな風にして飛ばされ、戻つてきているらしい。
- ・自分くらいの年頃にそうなるらしい。
- ・ちゃんと察して野宿用品を求めた自分は偉い
- ・・・え、何、ここは先祖、異世界の住人だったんですか。
- 自分は畳然とするほか無かった。
- だって、まさか憶測がちょっと違うがあつてナニコレ
- 「鈴歌もなるの・・・」
- つぶやくように、母。
- 「いいわ、行きなさい。」
- 決心するように。
- 「帰つてこないと承知しないわよ？」
- 泣き笑いの顔で。

ただ、自分はトクイのベラッという笑い顔を見せ、準備を始めればいいということを察した。

(Hライゼ、自分、空氣読んだ)

母の顔にもらい泣きしそうになりながら、必要なものなどを聞きつつ準備しつつ。

そして昼を迎える食事を食べ、またたりお茶を飲みつつ話し。

祠まで来る事になりました。

心細いもんね。

スニーカーを履いて、靴紐を結びなおして、荷物を持つて。自分たちは祠を目指す。  
どこにあるかは、心の中に地図があつてその場所が光っている、そんな感じで分かっている。

会話も無く歩いていくと、前方に目的の場所が。

「ついたよ。・・・もしかして見えない?」

見えないらしい、キヨロキヨロしている。

「私たちには見えないのねえ・・・でもなんだか懐かしいわ」

母はそういうて、ふふ、笑つた。

そして自分の首にかけていたネックレス(?)をはずして、自分にかけてくれた。

「お母さんは、次に会つときには返してね」

約束をひとつ。

そして祖父が言つ。

「お前が戻つてくのときにはわしは死んでもと思つからいの、元氣でな」

そうつて、はつはつはつ、と笑つ。

「じゃあ、行つてきます、ばいばい」

どうすればいいかは分かつていて、  
祠の中に手を入れればいいのだ。  
なにが入つてゐるか分からぬ、小さな祠のドアみたいなのをあけ、  
手を突つ込む。

直後、身体を襲つ浮遊感、  
意識は、飛んだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8601y/>

---

鈴歌、異世界へ

2011年11月27日10時47分発行